

価値観の研究の視座

——経緯・課題・展望——

真 鍋 一 史

- 1 価値観という概念
- 2 価値観という概念の操作化の試み
- 3 価値観の内容の諸領域
 - (1) Hofstede (1980, 2004) の研究
 - (2) Schwartz (1992, 2004) の研究
 - (3) Triandis (1995, 2004) の研究
- 4 ヨーロッパ価値観研究と世界価値観調査
 - (1) 経緯・現状・課題
 - (2) 世界価値観調査の性格
 - (3) 理論的枠組・仮説・知見
 - (4) 方法論的な議論

1 価値観という概念

価値観 (values) というテーマに関しては、これまで膨大な数の研究がなされてきており、このテーマをめぐる文献はこれまた膨大な数にのぼる。そして、そのような文献においては、価値観という概念の内容はきわめて多様である。価値観というテーマをめぐっては、すでにさまざまな文献レビューがなされてきている。それらの文献レビューにおいては、これまた膨大な数の価値観の定義 (definition) が紹介されている。ローマの格言をもじっていえば、「価値観の定義は、研究者の数だけ存在する」ということになる。

こうして、価値観の研究の視座は、何よりもまず、そのような概念の豊饒性というところに置かれることになる。それでは、なぜ、価値観という概念

は、これほどまでに豊饒な様相を示すものとなってきたのであろうか。

まず、考えられることは、価値観という用語が、「専門語」としてばかりでなく、「日常語」としても用いられてきたということである。例えば、日常生活のさまざまな場面で、「価値観の衰退 (a decline of values)」「価値観の危機 (a values crisis)」「価値観の教育 (education in values)」などの用語が用いられる。このような日常用語の豊饒性が専門語にも反映されることになる。これが第1の理由である。

つぎに、価値観という用語は、「専門語」として、さまざまな個別科学において用いられてきた。ここで特筆すべきは、この用語が、「規範科学 (normative science)」——哲学、倫理学、美学など——と「経験科学 (empirical science)」——社会学、政治学、心理学、経済学、人類学など——の両方において、広く用いられてきたということである。

さらに、価値観というテーマが、「規範科学」においても、「経験科学」においても、すでに長い研究の歴史をもっているということがあげられる。いうまでもなく、長い研究の歴史があるということは、それだけ多くの概念化 (conceptualization) と操作化 (operationalization) の蓄積があることを意味する。

以上のようなさまざまな理由から、価値観という概念の豊饒性がもたらされることになった。それでは、このような問題にどう対処するかが、つぎの課題である。つまり、このような概念の豊饒性のなかにあって、「価値観」という概念については、どのようにして共通の理解に到達することができるであろうかということである。このような課題に対して、ここでは経験科学、とくに独自の研究領域を発展させてきた経済学を除く、それ以外の社会科学の諸領域における価値観の諸研究を取りあげ、そこで提示されてきた価値観の諸定義の再検討を試みるという方法をとる。しかし、その場合、社会科学の諸領域における価値観の研究をすべて網羅的に取りあげるというのではなく、まずは1940年代から1960年代にかけての諸研究から、とくに主要なものとして判断される文献を選び出す。こうして選び出された文献を、つぎに年代順にあげておく。

〈1940～50年代〉

Morris (1956)

〈1960 年代〉

Allport, Vernon and Lindzey (1960), Gordon (1960), Kluckhohn and Strodtbeck (1961), Scott (1965), Rokeach (1967).

ここで、概念の検討のために取りあげる文献を 1940 ～ 1960 年代に限定したのは、このような価値観の研究の系譜をたどるならば、1960 年代以降になって、それまでの研究のスタイルとは異なる新しい研究の動向が出現したと考えるからにほかならない。それについては後述することにして、まずは価値観という概念の豊饒性にどう対処するかという問題にもどる。ここでは、この問題への取り組みのために、つぎのような視座を提案する。それは、価値観の研究についての概観のための諸定義の検討という視座である。比喩的にいえば、価値観の研究領域を全体的に把握するための「森を見る」という視座の導入である。そのような視座からするならば、上述のそれぞれの研究における価値観の定義を個別に検討していく必要はない。再び、比喩的にいえば、「木を見る」必要はない。では、どのような仕方、「森を見る」ことが可能となるであろうか。ここでは、つぎのような方法をとる。それは、価値観という概念が、社会科学の領域におけるほかの多くの概念と同様、社会的な場 (setting) における人間行動を説明するために理論的に作り出された「構成概念 (constructs)」であると考えられるところから、そのような概念を構成する諸要素 (components) のうち、さまざまな定義をとおして共通している諸要素に目をつけるという方法である。そのような共通要素としては、つぎの 5 つの内容が抽出される。

(1) 「価値観」という概念は、人びとの一連の心的過程を表す諸概念、例えば「欲求・要求 (need)」「動機 (motive)」「態度 (attitude)」「意見 (opinion)」「行動 (behavior)・行為 (action)」などとともに用いられる。そして、それら諸概念間の関係については、「価値観」は、「欲求・要求」や「動機」に深く根をおろしながら、「態度」を方向づけ、そしてそれらが「意見」や「行動・行為」につながっていく、というように説明される。

(2) 以上のように、「価値観」は、外部から直接に観察することのできな

い人びとの心的な傾向 (disposition)、あるいは性向 (propensity) の1つとして概念化される。この点が、外部から客観的に観察可能な「行動・行為」や「意見」と大きく異なるところである。

(3) 「態度」も外部から直接には観察できない。では、「態度」と「価値観」との違いがどこにあるかという、それについては、①特殊的⇔一般的、②個別的⇔包括的、③表層的⇔深層的、④短期的⇔長期的、などの点が指摘される。こうして、『価値観』が『態度』を規定する」という両者の関係が想定されることになるのである。因みに、「態度」と並んで、「信念 (belief)」という概念が用いられる場合もあるが、その場合は、「態度」がより動機的な志向性をもつものであるのに対して、「信念」はより認知的な志向性をもつものであると性格づけられる。

(4) 「望ましいもの (the desirable)」と「望まれるもの (the desired)」という2つの概念が区別されることがある。この場合は、後者が「客体としての価値 (value as the object)」ともいうべき側面であるのに対して、前者は「志向の一要素としての価値 (value as an attribute of the person's orientation)」ともいうべき側面を指す。ここで重要な点は、一般に、価値観とはまさにこの前者の側面を意味するものとして構成された概念であると考えられているということである。

(5) 以上のように性格づけられる「価値観」は、単にバラバラな心的構え (mental set) であることを超えて、いわば1つの「型 (pattern)」あるいは「体系 (system)」ともいうべきものとして概念的に構成されている。

以上、価値観という概念を構成する5つの要素について解説を加えてきた。このような知的作業を行うならば、価値観という多義的な概念も明確なものになってくる。

2 価値観という概念の操作化の試み

科学と呼ばれる人間の知的営為の目標は、新しい知 (knowledge) の発見とその定式化 (formulation)、そしてその蓄積 (accumulation) を踏まえた新しい経験的理論 (empirical theory) の構築というところにある。社会科学も、それが科学と呼ばれるものである限り、その例外ではない。そして社会科学においても、新しい知の発見は、変数間の関係の法則の定式化という形でなされる。そうであるならば、そのような知的営為は、社会現象の説明のための諸変数についての概念化と操作化の試みから始められなければならない。前のセクションの課題は、価値観の概念化の試みに検討を加えるということであった。そこで、つぎの課題は、そのような概念化を踏まえた操作化の試みについての検討である。それは、換言するならば、価値観の「測度 (measure)・指数 (index)・尺度 (scale)」に関する実証的な検討ということである。

じつは、前のセクションで取りあげた諸研究における「価値観の測度・指数・尺度」については、Braithwaite and Scott (1991) において、とくにそれぞれの信頼性 (reliability) と妥当性 (validity) に焦点を合わせながら、きわめて詳細な検討がなされている。ここで、再度そのような検討の結果について整理するという作業を行うならば、それは、いわば「情報の重複性 (redundancy)」ともいうべき問題につながる。そこで、このセクションでは、つぎの 1960 年代以降の価値観研究に新しいエポックをもたらした研究成果に目を向けていきたい。その場合、まず第 1 に注目すべき研究として、「ガットマン・スケール (Guttman scale)」の考案者として名を馳せた Guttman とその共同研究者による貢献をあげなければならない。その 1 つが、Levy and Guttman (1985) である。では、この共同研究の貢献がどこにあったかという、それは、この共同研究が以下のような独自の方法で「価値観」と「態度」を操作的に区別するとともに、それらの関係を実証的に確認したという点である。

- (1) 「価値観」という概念を測定するための経験変数 (つまり調査の質問

文)として、「望ましいもの」とされるさまざまな「目標」の「重要性」について「negative ⇔ positive の回答のカテゴリ」を設定する。

(2) そのような質問文で構成される調査票を用いて、1980年、イスラエルとスイスにおいてプリテストを実施する。

(3) 調査結果のデータ分析をとおして、これまで「態度」についてなされてきたさまざまな調査結果で見出されてきた以下の3種類の法則——ファセット理論 (facet theory) ——が「価値観」についての質問諸項目についても同じように成り立つものであることが確認された。

①第1の法則：attitude (ある対象に対する「非常にネガティブ」から「非常にポジティブ」までのカテゴリ)、intensity (その対象に対する attitude が「非常に弱い」から「非常に強い」までのカテゴリ)、closure (対象に対するオリエンテーションの方向が「決まっていない」から「決まっている」までのカテゴリ)、involvement (対象に対して「全くかわからない」から「非常にかわかる」までのカテゴリ) などの質問項目に対する回答としての人間行動の諸要素については、同じ要素についての質問諸項目間の関係は単調関係を示し、相関係数はプラス (かゼロ) となり、マイナスにはならないというものである。

②多調回帰の法則：これは異なる要素についての質問諸項目間の関係についての法則である。具体的にいうならば、intensity、closure、involvement は attitude に対してそれぞれ多調関係となり、順に U (あるいは V) 字型、N 字型、M 字型の回帰曲線が描かれるというものである。

③第2の法則：質問諸項目間に単調関係が示される場合に、「最小空間分析 (smallest space analysis)」——相関行列に示された n 個の項目間の関係を m 次元 ($m < n$) の空間における n 個の点の距離の大小によって示す方法であり、相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距離は大きくなる——を用いて、それら諸項目間の関係の大小にもとづいて幾何学図形が描かれる。質問項目がランク・オーダー (rank order) をもつ変数の場合は「modular」か「axial」の形、それがランク・オーダーをもたない変数の場合は「polar」の形が描かれることになる。前者に対応する理論 (regional theory) は Simplex、後者に対応する理論

は Circumplex と呼ばれる。これら 3 の形——modular、axial、polar——が組み合わせられると、それらが交差して作り出す分割線が cylinder (円筒形)、cone (円錐形)、sphere (球形)、rectangular parallelepiped (平行六面体) のような幾何学的構造を描くことになる。それぞれの図形に対応する理論は、Cylindrex、Conex、Spherex、Multiplex と呼ばれる。

(4) 以上から Guttman らは、「価値観」は「態度」という概念の下位概念として位置づけることができるという結論に到達した。

社会科学の科学化のためには、概念の操作化とその測定にもとづく実証的な議論の展開が不可欠である。こうして価値観の研究の領域においても、「態度」と「価値観」をめぐる概念論争は、ようやく実証科学的な議論のレベルにまで高められてきたといえよう。確かに、Guttman の構築してきたファセット理論のなかに「価値観」の研究の成果を位置づけるという試みは、実証科学のこの研究領域における 1 つの到達点を示す方法論的なブレイクスルーであったといえる。しかし、社会科学の全体像からするならば、それはいわば「車の両輪」の 1 つであっても、全てではない。もう 1 つの輪として、現実社会のリアリティという側面がある。社会科学としての価値観の研究には、常に「レリバントな問題の立て方」が要求される。具体的にいうならば、それは、「価値観」をサーチライトの光に喩えるならば、そのような光によって、どのような社会の実相が見えてくるだろうかという問題の立て方である。このような問題関心から、Guttman の用語でいえば、「価値観」の具体的な「内容の諸領域 (content domains)」を国際比較あるいは文化比較の視座から提案するさまざまな研究が出現してくることになる。そのような新しいタイプの「価値観研究」の事例として、ここでは Hofstede (1980, 2004)、Schwartz (1992, 2004)、Triandis (1995, 2004) の 3 種類を取りあげる。

3 価値観の内容の諸領域

ここでは、Hofstede、Schwartz、Triandis による価値観の研究を、「価値観の内容の諸領域」というところに焦点を合わせて、まとめておきたい。そ

れは、上述の価値観という概念の構成要素の共通部分に焦点を合わせたその定義の整理の仕方から明らかになってくるのは、いわば「価値観」という概念の「形式的な性格 (formal characteristics)」の側面であって、それだけでは価値観という概念に含まれる「実質的な意味内容 (meaningful contents of values)」の側面は見えてこないと考えるからにほかならない。

(1) Hofstede (1980, 2004) の研究

Hofstede (1980) は、世界の 40 か国において、多国籍企業 (IBM) に勤務する人びとを対象に大規模な質問紙調査を実施し、そのデータ分析——因子分析 (factor analysis) など——にもとづいて、4 つの価値観の次元 (dimension: 因子) の抽出に成功した。それが①権力の格差 (power distance)、②不確実性回避の傾向性 (uncertainty avoidance)、③「個人主義 (individualism)」対「集団主義 (collectivism)」、④「男性的価値 (masculinity)」対「女性的価値 (femininity)」の 4 つである。そして、それぞれの価値観の次元 (因子) の測定のために用いられた指標 (indicator) が、①権力格差指標、②不確実性回避指標、③個人主義指標、④男性化指標、である。こうして、これら 4 つの次元 (因子) を組み合わせることによって、40 か国についての文化的プロフィールを描くことを試みた。

(2) Schwartz (1992, 2004) の研究

Schwartz (1992) も、世界の 20 か国を対象に、質問紙調査を実施し、そのデータ分析——Guttman の開発した「最小空間分析」など——をとおして複数の「価値類型 (value type)」の抽出を試みた。Schwartz は、多くの場合、調査対象者に「学校の先生と大学生」を選んでいる。そして、このような大規模な「価値観の比較研究」をとおして、10 種類の「価値類型」を抽出した。①普遍主義 (universalism)、②慈悲 (benevolence)、③伝統 (tradition)、④同調 (conformity)、⑤安全 (security)、⑥権力 (power)、⑦達成 (achievement)、⑧快楽主義 (hedonism)、⑨刺激 (stimulation)、⑩自己志向 (self-direction) がそれである。Schwartz (2004) は、その後、同じ線上で研究を進め、それらを① Harmony (自然保護、世界平和、自然との調和)、

② Embeddedness (国の安全保障、社会秩序、自制心)、③ Hierarchy (権威、社会的努力、富)、④ Mastery (社会的承認、目標選択、影響)、⑤ Affective Autonomy (生活を楽しむ、娯楽、刺激のある生活)、⑥ Intellectual Autonomy (創造性、好奇心、自由)、⑦ Egalitarianism (平等、責任感、社会正義)、にまとめ直している。

(3) Triandis (1995, 2004) の研究

いうまでもなく、Triandis は、「個人主義 (individualism) と集団主義 (collectivism)」に関する研究の第 1 人者であり、Triandis (1995) はそれまでの研究——多くの場合、心理学的な実験の手法が用いられ、被験者として大学生が選ばれている——の集大成ともいえるものである。Triandis は、「個人主義と集団主義」についてさまざまな測定尺度を開発するとともに、つぎのような一般的な傾向を報告している。つまり、個人主義文化では、人びとは集団から分離している。人びとは自律的である。人びとの社会的行動は楽しみを最大化することの結果であり、対人間の契約にもとづいている。一方、集団主義文化では自分自身を集団の一部と考え、多くの状況において個人の目標より集団の目標を優先させる。人びとの社会的行動は、規範、義務、責務の結果である。ここで注目すべき調査結果の 1 つとして、個人主義者が「楽しい生活」といった価値観を重要なものと考えてのに対して、集団主義者は「両親や年長者を尊敬すること」といった価値観を重要なものと考えてという知見があげられている。

以上において、価値観の研究の系譜のなかで、主として 1960 年代以降に出現してきた新しい研究の動向について概観してきた。そこで、最後に、国際比較あるいは文化比較という視座については、その同じ問題関心の線上にありながらも、やはりここで取りあげた 3 者とは明確な一線を画することのできる研究動向についても触れておかなければならない。それは、この動向が社会科学の研究における「レリバントな問題の立て方」という点からして、きわめて重要な調査研究プロジェクトであるからにほかならない。それは、「ヨーロッパ価値観研究 (European Values Study: EVS)」、そして「世界価値

観調査 (World Values Survey: WVS)」と呼ばれる一連の「価値観」研究プロジェクトである。

4 ヨーロッパ価値観研究と世界価値観調査

(1) 経緯・現状・課題

1970年代以降、価値観というテーマが、新しい様相のもとに、社会科学の領域で活発に議論されるようになってきた。ヨーロッパでは、価値観というテーマがとりわけ切実な問題となってきた。それは、ヨーロッパが、一方で「社会の世俗化 (secularization)」、そして他方で「国家の統合 (integration)」という大きな現実の課題に直面してきたからにほかならない。こうして、1970年代になって「ヨーロッパ価値観システム研究グループ (European Values Systems Study Group: EVSSG)」が結成されそれが、やがて「ヨーロッパ価値観研究」へと発展していった。このような経緯からして、EVSは、「ヨーロッパの国ぐには、その統合を容易にする共通の価値観の基盤といったものがあるのであろうか、それとも統合を困難にする価値観の差異といったものがあるのであろうか」といったヨーロッパの国ぐにに固有の問題関心から出発したことがわかる。

1980年代後半になって米国ミシガン大学の Inglehart がこのプロジェクトに参加することになり、大きな変化が現れてくる。それはつぎの2点にまとめられる。①調査対象国がヨーロッパの国ぐにから世界の国ぐににまで拡大され、EVSは同時にWVSと呼ばれることになった。②EVSは、本来、ヨーロッパの国ぐにの価値観の諸相とその変化の軌跡を捉えるという「記述的性格」をもつものであったが、Inglehartの提唱する調査の理論的枠組が導入されることで、同時に、「分析的性格」を併せもつことになった。

ただ、EVSグループが、ヨーロッパに固有の価値観の側面に関心をもち続けていることも事実である。今後、調査主体が、アジアの国ぐに、そして、ラテン・アメリカの国ぐに、さらにアフリカの国ぐにというように世界の複数の地域的な単位に分かれていくとするならば、それらがWVSとどのような創造的な協力関係を発展させていくかが、この世界的規模の社会調査プロ

ジェクトにとっての最大の課題となるであろう。

(2) 世界価値観調査の性格

それでは、このような経緯で実施されるようになった WVS は、どのような性格の社会調査といえるのであろうか。それは、いわゆる①大規模な (large-scale)、②多くの国ぐにを対象とする (multi-national)、③比較 (comparative)、④質問紙 (questionnaire)、⑤調査 (survey) としての性格を併せもつものといえる。①大規模サンプル：各国 (地域) から一般成人 (18 歳以上) 男女、1000 サンプルを目標に実査が行われる。②調査対象国 (地域) は第 1 回 (1981 ~ 84 年) 21、第 2 回 (1989 ~ 93 年) 47、第 3 回 (1994 ~ 98 年) 57、第 4 回 (1999 ~ 2004 年) 73、第 5 回 (2005 ~ 08 年) 56 で、延 102 の国 (地域) に達する。③比較は、国 (地域) の比較とともに、時系列の比較も可能である。④質問項目は 250 以上にも及び、それらは「世論調査 (public opinion poll)」で取りあげられる時事的な争点 (issue) をめぐる質問ではなく、人びとの日常生活にまつわるより一般的な信念・態度・価値観などの側面に焦点を合わせるいわゆる「総合社会調査 (general social survey)」の質問である。それらの項目では、一方で家族、仕事、宗教、倫理、社会、政治、経済、科学、技術、環境など広くさまざまなテーマを取りあげるとともに、他方でこれらのさまざまなテーマをとおして共通に見られるようになってきた現代の価値観の側面を抽出する試みがなされている。⑤この調査研究は、単に「学問的要請」にこたえるだけのものではなく、さらに、例えば政策立案にも役立つというように、「社会的要請」にこたえることができるものでもある。

(3) 理論的枠組・仮説・知見

WVS と EVS を併せて、「価値観調査」の基本的な知見 (findings) の 1 つが、世界の国ぐには、それぞれの「経済的な豊かさ」のレベルの違い——「農業社会」から「産業社会」、そして「産業社会」から「ポスト産業社会」への移行——を反映して、2 つの次元における価値観の違いを示しているというものである。

①「伝統的 (traditional) 価値観——世俗的 (secular)・合理的 (rational) 価値観」の次元。具体的にいうならば、前者には「宗教の重視」「絶対的な規範の尊重」「権威への服従」「伝統的な家族観の保持」「離婚、妊娠中絶、安楽死、自殺の否定」「ナショナリズム・愛国心の高唱」「紛争、対立の回避」などが入る。そして後者にはこれらとは二項対立的な価値観の内容が含まれる。

②「生存 (survival) 価値観——自己表現 (self-expression) 価値観」の次元。同じく、前者には「物質主義価値観 (materialist values)」「低い主観的ウェルビーイング」「他者に対する低い信頼感」「制度・機関に対する高い信頼感」「外集団への不寛容」「男女平等、環境問題への低い関心」「科学・技術への高い信頼感」が入る。そして後者にはこれらとは二項対立的な価値観の内容が含まれる。

そこで、これら2つの次元を座標軸の縦軸と横軸におき、調査対象国を価値観の得点にもとづいてプロットしていくならば、①国民1人当たりのGNPが2,000ドル(1995年)を下回る国々には、そのマップの左下のゾーンに、そしてそれが15,000ドルを超える国々には右上のゾーンにそれぞれ位置しており、それ以外の国々には両者の中間のゾーンに位置している、②過去20年間に、それぞれの国における変化は、右上のゾーンへの移行という形で起こっている、ということが確認された。

このような「価値観調査」の残された課題として、以上の2つの次元で捉えきれない価値観の諸側面は、それぞれの国の歴史的・文化的な諸要因とどのように関連しているかについての、よりインテンシブな探究ということがあげられる。

(4) 方法論的な議論

最後に、Inglehartの価値観研究の方法論的な議論を取りあげる。ここでは、それを、価値観の測定をめぐる方法論的な批判に対するInglehartの反論というところに焦点を合わせながら、まとめておきたい。

①人間の価値観というものは、本来、多次元的なものであるにもかかわらず、Inglehartは価値観の変化を上述の2つの次元のみで捉えているという

批判。この批判に対して、Inglehart は、人間の価値観のあらゆる変化がこれら 2 つの次元のみで捉えられるというのではないが、しかし重要な点は、この 2 つの次元における人びとの価値観の変化が社会変動の重要な側面を反映しており、そこに焦点を合わせることによって、世界の国ぐにの今後の変化の方向が予測可能になるというところにあると反論している。確かに、このような「価値観」というところに焦点を合わせた「現代社会論」の試みは、これまでの価値観研究にはなかったパースペクティブであり、ここに到ってはじめて「価値観の社会科学」の成立が可能となったといっても過言ではない。

②人びとの価値観の測定方法としては、序列法 (ranking method) よりも評定法 (rating method) の方が有効であるという批判。確かに、評定法は態度測定に広く用いられている方法であり、すでに取りあげた Guttman の場合も、この方法にもとづいて人間行動の法則化と理論化を進めてきた。では、このような批判に対する Inglehart の反論がどのようなものかという、その反論は、まず何よりも「価値の優先順位 (value priorities)」という理論変数の重要性の主張から始める。それは、回答のレンジ (range) の変化 (例えば、「経済的安定」は「好ましい」としてきた人びとが、それを「好ましくない」と回答するように変わってきたというような変化) という側面ではなく、どれも好ましいことだとされているような複数の事柄についても、強いていえばありうるはずの優先順位の変化という側面に注目するということである。では、なぜこのような側面に注目するかというと、それはそれぞれの社会の方向を決定する政治という領域においては、さらに普段の日常生活のさまざまな領域においてさえ、われわれは常に何らかの「選択」を迫られており、そのような選択を導くものこそが「価値の優先順位」という基準にはほかならないと考えるからであるという。そして、このような方法論的立場に立つことによって、はじめて Inglehart は、独自の「ポスト近代化論」を展開することが可能となったのである。

References

Allport, G.W., Vernon, P. E., & Lindzey, G. (1960). *Study of Values*. Boston:

- Houghton Mifflin.
- Braithwaite, V. A., & Scott, W. A.(1991). Values. in Robinson, J. P., Shaver, P. R.,& Wrightsman, L.S.(Eds.) *Measures of Personality and Social Psychological Attitudes* (Volume 1), San Diego etc.: Academic Press.
- Gorden, L. V. (1960). *Survey of International Values*. Chicago: Science Research Association.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's Consequences: International Differences in Work-Related Values*. Beverly Hills, CA: Sage Publications (=1984, 萬成博、安藤文四郎監訳『経営文化の国際比較』東京：産業能率大学出版部).
- Hofstede, G. (2004). Epi-dialogue. in Vinken, H., Soeters, J., & Ester, P. (Eds.) *Comparing Cultures: Dimensions of Culture in a Comparative Perspective*. Leiden・Boston: Brill.
- Halman, L., Inglehart, R. et al. (2008). *Changing Values and Beliefs in 85 Countries: Trends from the Values Surveys from 1981 to 2004*. Leiden・Boston: Brill.
- Inglehart, R. (1977). *Modernization and Postmodernization: Cultural, Economic, and Political Change in 43 Societies*. Princeton: Princeton University Press.
- Kluckhohn, F. R., & Strodtbeck, F. L. (1961). *Variations in Value Orientations*. Evanston, IL: Row, Peterson.
- Levy, S., & Guttman, L. (1985). A Faceted Cross-Cultural Analysis of Some Core Social Values. in Canter, D. (Ed.) *Facet Theory: Approaches to Social Research*, New York: Spriger-Verlag.
- Morris, C. W. (1956). *Varieties of Human Value*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rokeach, M. (1967). *Value Survey*. Sunnyvale, CA: Halgren Tests.
- Schwartz, S. H. (1992). Universals in the Context and Structure of Values: Theoretical Advances and Empirical Tests in 20 Countries, in Zanna, M. F. (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*. (vol.25) San Diego etc.: Academic Press.
- Schwartz, S. H. (2004). Mapping and Interpreting Cultural Differences around the World. in Vinken, H., Soeters, J., & Ester, P. (Eds.) *Comparing Cultures: Dimensions of Culture in a Comparative Perspective*. Leiden・Boston: Brill.
- Scott, W. A. (1965). *Values and Organizations*. Chicago: Rand McNally.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and Collectivism*. Westview Press (= 2002,

神山貴弥、藤原武弘訳『個人主義と集団主義』京都：北大路書房).

Triandis, H. C. (2004). Dimensions of Culture Beyond Hofsteds. in Vinken, H., Soeters, J., & Ester, P. (Eds.) *Comparing Cultures: Dimensions of Culture in a Comparative Perspective*. Leiden • Boston: Brill.